

平成22年度 日立市教育研究会 先進校等調査派遣研修報告書

日立市立 日高 小学校 教諭 渋谷 恭子

- 1 派遣期日 平成22年11月12日（金）
- 2 研修先 学校名 東京都北区立赤羽台西小学校
所在地 〒115-0053 東京都北区赤羽台2丁目1番34号

3 研修内容

研究主題 「キー・コンピテンシーを育てる指導の工夫」
～言語力の育成と活用を通して～

(1) 研究主題について

研究の視点

キー・コンピテンシーとは、経済協力開発機構(OECD)が、「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力を「主要能力(キー・コンピテンシー)」として、平成12年から開始したPISA調査の概念的な枠組みとして定義づけたものであり、3つのカテゴリーで構成されている。

赤羽台西小学校では、このキー・コンピテンシーを育成すると考えられる下記の3つの対話に視点を置き、さらに「協同的な学び」を支える言語力を加え研究を進めている。

〈OECDのキーコンピテンシー〉

〈研究の視点〉

社会・文化的、技術的ツールを
相互作用的に活用する能力



ツールとの対話

ツールとは、教材などの情報や教具等を指し、そのツールを読んだり、見たり、使ったりすることで、分かることや新たな課題を見い出すことが対話である。対話することが可能な教材・教具をどのように準備し、どの場面で子どもたちと出会わせるか考えていこうという視点。

多様な社会・グループにおける
人間関係形成力



他者との対話

友達や教師など他者と対話することにより、自分の考えや思いに気付いたり、考えが広がったり、深まったりしながら学ぶことを目指している。他者との対話をどの場面で、どのような形態で取り入れ、思考を深めていくのか考えていこうという視点。

自律的に活動する能力



自己との対話

自分の考えを確認したり、自分の考えをまとめたりする活動も「自己との対話」である。発達の段階を考慮し、どこで、どのように自分と向き合わせていくか考えていこうとする視点。

言語力
(コミュニケーション能力)

言語力の中でも特にコミュニケーション力という観点で、発語分析を基に、教師の発話と言語力の育成の関係について考察する。
(テキスト・マイニングによる分析)

(2) 授業参観

【公開授業1】(10学級公開)

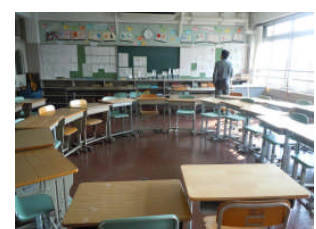
・グランドデザインのある学び

教室の廊下にそれぞれの教師のグランドデザインが掲示してあった。グランドデザインとは、教師として、また一人の人間として何を成していきたいのか、どのような子どもを育てていきたいかを明確にしたものである。全ての教師がこのグランドデザインを基に授業を進めていた。



・学習環境デザイン

掲示物や机の配置などのハード面のデザインと、「協同的な学び」がより円滑となるような人間関係、教師の立ち位置、語りかける声のトーン、授業の進め方などのソフト面のデザインの両方を各教師が、授業の実践の中に意図的に取り入れていた。



【公開授業2】(3学級公開)

5年1組 国語 君ならどうする?～理由や根拠を明らかにして話し合おう～

指導者 伊藤 利恵子先生

◎ 本单元について

「息子のカード」(朝日新聞)という新聞記事を教材に、『臓器移植』について、理由や根拠を明確にしながら、自分の考えを話す活動である。7月に改正された臓器移植法の施行によって決して他人事ではなくなった問題に、「もし自分なら」「もし自分の家族なら」「自分が移植される立場なら」とジレンマのある課題を取り扱う。子どもたちが、難しい課題にしっかりと向き合い、キー・コンピテンシーをはぐくむ学びを構築することをねらいとした授業である。

◎ 研究の主題に迫るための指導の手だて

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① ツールとの対話・・・新聞記事や資料(Webなど)臓器移植について色々な立場の考えに触れるようにする。② 他者との対話・・・グループ学習により、自分と違う考えや同じ考え、様々な視点での考えに触れることで、自分の考えを確かめたり、考え直したりして、最終的に自分なりの答えを見つける。③ 自己との対話・・・教材、資料、友達の考えに出会うことを通して、自分の思いに気付いたり、新たな考え方を生み出したりする。④ 言語力の育成と活用を通して
友達の考えを想像しながら聴いたり、確かめたりする活動を通して、思いを交流するコミュニケーション能力をはぐくみたい。 |
|--|

◎ 授業の展開

児童は前時までに学習した資料をもとに、自分がドナーや家族になった場合について、グループで考えの交流をする。その後で、グループで解決できなかったことについて、全員での話し合いへと展開していく。児童は、自分の考えを皆に一生懸命伝える姿が見られた。難しい課題であるにも関わらず、誰もが友達の考えに耳を傾けているように見えた。「YES」「NO」の答えを求めるのではなく、一人一人が自分の課題として真剣に受け止めているようだった。また、教師は、子どもたちの話をつなぎ合わせる役割を果たしているのも印象的であった。

(4) 講演

東京大学大学院教授 佐藤 学先生の講演「キー・コンピテンシーと協同的な学び」より

- ・授業の中で、一斉授業のためのグループ活動は多く見られるが、協同的なグループでの学び合いが弱い。小学校3年生からは、協同的な学び合いを取り入れていかななくてはならない。
- ・課題を設定する際には、課題のレベルをあげる必要がある。発展から基礎へと展開していくことで、公式を使わざるを得なくなる。そのことにより、学びが背伸びとジャンプのあるものになり、子どもたちが夢中になる。
- ・教師には、センスと教養が必要である。学びがその教科の本質に迫っているのか、一つの単元をやる際には、それに関する本を一冊は読むようにしたい。教え方の本ではない。
- ・赤羽台西小では、児童・教師の声がとても小さい。これは、子どもたちの微妙な話の語尾やセンテンスを互いに聴き合うためである。学び合いに大きな声はなじまない。
- ・教師と子どもたちの距離の近いゼミナール型の授業を目指し、質の高い学びを提供していかななくてはならない。

(5) シンポジウム

青山学院大学教授 荻宿 俊文先生「いま、学校教育に求められるもの」より

- ・赤羽台西小学校の発話分析の結果、教師の発話は児童よりも少なくなっているのが分かった。教師の発話を必要最小限にとどめ、児童の発話を増やすよう授業をデザインしてきた結果である。児童の一文における発語数も1年間で倍に増え、児童のほとんどが発言するようになった。教師が児童の発言をよく聴き、再確認したり、新しい視点を持ちこんだりしながら、授業をデザインしていくことで、コミュニケーション能力が育成されてきた。
- ・教師は、自分の授業の仕組みを知ることの意味をしっかりと把握したい。しかし、自分のことは自分で分からない。そこに他者の目が必要になる。先輩や同僚教師と授業のことを話し合い、検討してもいい。経験の質とは、自分の授業を他者の目を借りて、振り返っていくことや自分の授業の特徴を知ることが高まるものなのである。

4 感想

赤羽台西小学校の子どもたちからは、学ぶ楽しさを、先生方からは子どもたちと一緒に授業を作り合う、教員同士が育ち合う姿を感じることができました。佐藤学先生、荻宿先生のお話を聞くことができ、たいへん貴重な経験であった。今後、授業実践の中に取り入れていきたいと思う。